

人新世の「資本論」を読み、議論する

写真は9月に刊行された斎藤幸平さんの新書。375ページの肉厚の新書であり、示唆に富み考えさせられることが多く、読み終わるのに思った以上に時間がかかった。本書カバー裏から一人類の経済活動が地球を破壊する「人新世」=環境危機の時代。気候変動を放置すれば、この社会は野蛮状態に陥るだろう。それを阻止するためには資本主義の際限なき利潤追求を止めなければならないが、資本主義を捨てた文明に繁栄などありうるのか。いや、危機の解決策はある。ヒントは、著者が発掘した晩期マルクスの思想の中に眠っていた。世界的に注目を浴びる俊英が、豊かな未来社会への道筋を具体的に描き出す。



昨日、京都のオンライン形式の研究会で本書を取りあげて、斎藤さんにも参加してもらい、2時間半余りにわたり議論した。まず、東京の医療生協理事長の吉岡尚志さんが本書のポイントを紹介して、とくに医療と協同組合の現場から問題を提起した。そして参加者から本書の感想と斎藤さんへの質問を順に述べていった。私も第4章「人新世のマルクス」、グリーン資本主義などを批判して資本主義そのものを問う問題意識と展開に注目したと述べ、「公共私」のなかで公の地方自治体の役割について質問した。休憩をはさんで、斎藤さんが参加者の質問にも答えながら、マルクス研究の経過、本書執筆の問題意識などを語った。世界的な気候変動のもとで、コモンのあり方と関連づけて資本主義批判を展開した。脱成長、コミュニズムでいいのか迷ったが、とりわけ新しい世代に対して問題を投げかけた。わたしが質問した地方自治体については、バルセロナなどヨーロッパの改革の動きに注目している。大阪の動向についても、カジノや万博ではない住民のための成長、持続可能性、女性の力について指摘があった。

再び休憩のあと、宮本憲一先生が次のように長めのコメントをした。本書と『大洪水の前に』は、未来社会へのアプローチ、新しいマルクス研究として示唆に富む。社会主義の評価を踏まえて、資本主義のあとの次の社会像をどう描くか。日本の公害・環境は、市民運動の力が大きかった。改革と体制転換のつなぎ目をどうするかが問題。『資本論』第2巻の再生産論に疑問をもち、『経済学批判要綱』から、資本主義社会の基盤である社会資本を理論構成していった。素材から体制へという方法論である。都留重人さん、宇沢弘文さん、そして私は使用価値を重視してGNP=フロー中心の経済学を批判した。

これに対して、斎藤さんが一挙に体制転換ではなく、コモン型社会、コモンの再生を考えている。その点で使用価値、エッセンシャルワークを重視している。3人の先生の業績に学びながら、研究を発展させていきたいと結んだ。

新型コロナウイルス感染急拡大でオンライン形式となったが、時間を忘れさせるような研究会となった。宮本先生と斎藤さんの直接対談を期待したいものだ。

(2020年11月22日)